

前方後円墳を比較する

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

ひとくちに前方後円墳といっても、その形や大きさには様々なものがある。前方後円墳の形や規模を比較することは、この時代を理解するうえで重要である。ここでは、京都市内で、造られた当時の姿を最もよくとどめている西京区てんのうもり天皇の杜古墳を例に、前方後円墳を比較することの意味について少し掘り下げて考えてみよう。

墳形を比較する

前方後円墳を比較する一般的な方法は、測量図を用いて墳丘の形を比べることである。この場合は、主に前方部と後円部の比率や前方部の開き具合に着目して、形態を比較する。こうした作業を進めると、よく似た古墳が規模や地域を越えて抽出できる。

天皇の杜古墳は、後円部が大きく、前方部が低平な前期古墳特有の墳形をもつ。これに類似する形態の古墳として奈良県ひばす日葉酢ひめのみこと媛命陵古墳がある。ヤマト政権の大王の墳墓と考えるとよい巨大古墳である。

両者の平面図を、結尺を調整して重ねてみたのが図1である。これをみると両者は細部もよく一致する。形態の酷似する古墳どうしの組み合わせは他にも多く指摘でき、単に偶然の一致とはみなせない。これほどそっくりの古墳が異なった地域にみいだせるということは、



空から見た天皇の杜古墳（南西から）手前が前方部。奥を横切るのは国道9号線。

両者が共通の設計企画で築造されているに違いない。

共通の設計企画で築造された古墳に葬られたそれぞれの被葬者は、互いにどのような関係にあったのだろうか。いまのところ、明確な答えを出すことはできないが、日葉酢媛命陵古墳の被葬者であるヤマト政権の大王と天皇の杜古墳に葬られた洛西の一地方首長が、とりわけ密接な関係を結んでいたことは容易に想像できる。

このように、前方後円墳の形を比較することで被葬者間の類縁関係を知る手がかりが得られるので



図1 墳形の比較

赤は日葉酢媛命陵古墳。黒は天皇の杜古墳。

ある。

規模を比較する

天皇の杜古墳と日葉酢媛命陵古墳の全長は、それぞれ83 mと208 mで、その比率は1:2.5となる。そこで古墳の全長を基準に比較したのが図2である。両者の差は歴然としている。しかし、実際はこれに高さ加わるから、その差はさらに拡大する。

では、体積で比較するとどうなるだろう。図3で両古墳の体積を、立方体の数で示した。天皇の杜古墳が約1万立方メートルであるのに対し、日葉酢媛命陵古墳は約15万立方メートルに達し、その差に驚かされる。墳長の差は体積に換算すると3乗倍になり、とてつもない差となって表れるのである。こうした傾向は、図4に示した大形古墳の体積相関図を見れば歴然とする。この図から巨大古墳1基の体積が中・小古墳の十数倍から数十倍に匹敵する様子が理解でき

るだろう。

格差の原因は何か

巨大古墳を造営するには、他にも膨大な量の葺石や埴輪が必要であったから、費やされる労働量は地方の中・小古墳とは比較にならないほど大きなものだったといえる。こうした格差はいったい何に基づいているのだろうか。

大きな古墳を築造するには、多くの労働力を動員できる社会制度の成立が前提条件である。大きな前方後円墳が日本の各地に存在していることから、こうした社会制度が早く地方の社会にまで及んでいたことは明らかである。

ところで、ヤマト政権が他とは隔絶する規模の古墳を築造するには、地方から大勢の人間を労働力として徴発する必要があった。一方、地方の首長もまた、古墳を築かねばならなかった。しかし、労働力の動員はあくまで、みずからの支配がおよぶ地域からに限られ、

また、ヤマト政権に人員を差し出す義務も負っていたのである。日葉酢媛命陵古墳と天皇の杜古墳を例にいうなら、前者は各地から集められた労働力で築かれた大王の墳墓であるのに対し、後者はそれに人員を差し出す側の地方首長の墳墓なのである。

大王墓とされる巨大古墳と地方首長墓とのあいだにみる規模の格差の要因は、築造に動員される労働力と、それを規定している権力のあり方に求められるのである。

前方後円墳の墳形や規模の大きさを手がかりに、少し検討を加えたところ、いくつかの興味深い内容が明らかとなった。古墳は記されたもののない時代の歴史を理解する貴重な文化遺産である。前方後円墳は築造された数が少ないだけに特に貴重である。これ以上壊さず、大切に後世に伝えたいものである。

(丸川義広)

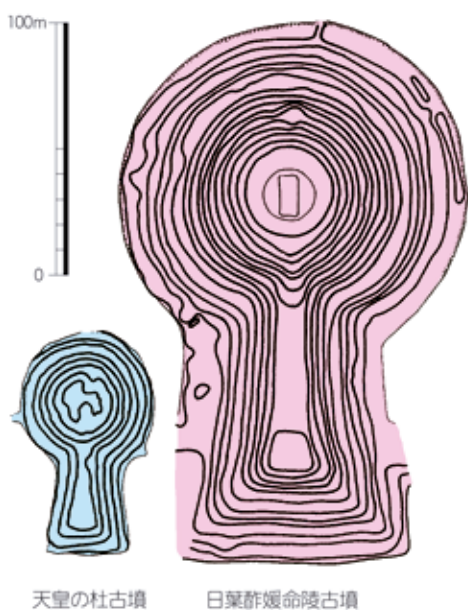


図2 墳長の比較 (1/3000)

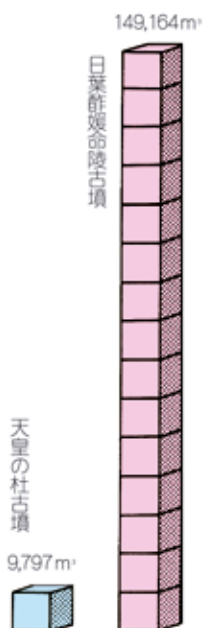


図3 体積の比較

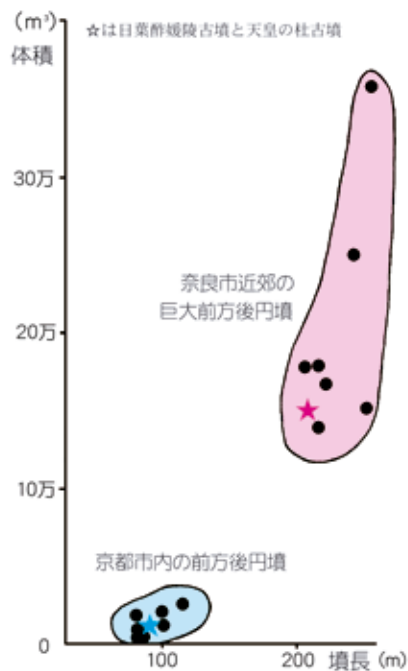


図4 墳長と体積の比較の相関グラフ
石井昇『前方後円墳築造の研究』より